

ロックのローカル化

《場》とライフスタイル

《場》とは

- ▶ ある社会空間のなかのある現象（例えば音楽）について、利害をもつ人たちにより構成される圏域のこと。
- ▶ それぞれの《場》には特有のルールと序列があり、その現象に関する価値判断（立場）はそうしたルールや序列、そして《場》を共にする他の参与者との関係性のなかで決まる（参与者は、その《場》において価値の高いとされる方向に向けて動機付けられ（卓越化）、それを目標に競合している）。

経済資本と文化資本

- ▶ 文化資本：親族から授けられたり自分自身で学習した教養や知識、美意識などとして蓄積される資本
- ▶ 文化的好み（テイスト）というものは、経済的必要性からいかに距離をとれるかによって低俗なものから高級なものへと序列付けられている。

ハビトゥス：ポジションとディスポジション

- ▶ かくして我々はそれぞれ、所有している経済資本および文化資本の量により、《場》のなかにおける自分のポジション（位置）を規定されている。しかし、それを甘んじて受入れる人はいないだろう！
- ▶ 《場》のなかで次のポジションへ動こうとする気持ちを性向（ディスポジション）という
- ▶ そのときにどちらの方向にどれくらい進む（あるいは同じところに留まる）かという行為実践（プラティーク）を規定しているのがハビトゥス（生きてゆくなかで意識・無意識に身につけた慣習）である

ロックンロール伝来

日本：カントリー？ ロカビリー？ グループサウンズ？

ジャズミュージシャンの動向

- ▶ GHQの文化政策→日本人によるジャズやブギウギの誕生
 - ▶ 「民主主義」推進のために大衆文化を利用→封建制度や天皇を賛美する内容を検閲
 - ▶ 映画の主題歌としてヒット曲が生まれる（戦前の「歌謡曲」のパターン）
 - ▶ ラジオもジャズや歌謡曲を積極的に放送する
 - ▶ 進駐軍の娯楽文化（銀座）
 - ▶ GIクラブ→日本人ジャズミュージシャンたちにとって格好のマーケット
 - ▶ ただし1948年に風俗営業取締法が施行され日本人向けのダンスホールは規制下に
 - ▶ 進駐軍ラジオ→アメリカのポピュラー音楽を直接届ける

長かったロカビリー時代

- ▶ 平和の到来
- ▶ 1951年、サンフランシスコ講和条約調印。翌年施行
 - ▶ GHQの解散→GIホールに出入りしていたジャズミュージシャンが失業→レコード会社に接近
- ▶ 音楽業界の動向
 - ▶ 1951年、原盤輸入の再開。1953年にはレコード生産が1941年の水準に
 - ▶ 1951年、ラジオの民営化開始
 - ▶ 1953年、テレビ放送の開始
 - ▶ 映画業界と対立
 - ▶ 街頭テレビ
- ▶ 《郊外》の誕生
 - ▶ 1956年『経済白書』～「もはや戦後ではない」
 - ▶ 50年代後半：3種の人気（白黒テレビ・冷蔵庫・洗濯機）
 - ▶ 60年代：3C（カラーテレビ、クーラー、自家用車）

- ▶ 高度経済成長に伴い、郊外のマイホーム生活がサラリーマンの夢に
 - ▶ 日本映画界がテレビに映画の放映権を認めず、アメリカの映画やホームドラマが流入
 - ▶ 1960年代以降、旧東京市人口が減少、多摩地区および隣接県の人口が増加
- ▶ GI向けに演奏していたジャズミュージシャンの一部が、独自の音楽ビジネスを確立
 - ▶ レコード会社とは独立したプロダクション会社、原盤出版社を設立。従来の専属制と衝突（→ナベプロ）
 - ▶ 「和製ポップス」（ジャズ、カントリー&ウェスタン、ロカビリー、ハワイアンなどごっちゃませ）
 - ▶ 銀座や新宿のジャズ喫茶での演奏
 - ▶ 民放ラジオがNHKとの差別化のために取り上げる
- ▶ 第一回日劇ウェスタンカーニバル（1951年）
 - ▶ 一週間に5万人の若者を動員→若者マーケットの誕生
 - ▶ 規制強化
 - ▶ 1958年：放送法改正に伴い、各局が放送番組審議会を設置
 - ▶ 1958年：風俗営業法改正、「少年非行の温床」としてジャズ喫茶が規制対象に
 - ▶ 1964年：東京オリンピックに先駆け風営法規制強化。銀座などで開催直前に200人以上が補導

電波メディアとグループサウンズ

- ▶ ポップスのバックバンドが、ビートルズなどの影響を受けてフォークやロックを歌い始める
- ▶ グループサウンズ（GS）の誕生
 - ▶ ブルーコメッツ、ザ・スパイダース、ザ・タイガース、ゴールデン・カップス、ザ・サベージ……
- ▶ 独立系プロダクション会社、ラジオ、テレビ、音楽雑誌などをまとめたプロモーション体制を確立
 - ▶ 日本テレビ『シャボン玉ホリデー』（1961年6月から）
 - ▶ ナベプロ（渡辺晋・渡辺美佐）
 - ▶ 雑誌『ミュージックライフ』（1937年創刊。元々はジャズ誌だが、60年代にロックンロール中心に）
 - ▶ 新興音楽出版社（草野昌一 a.k.a. 漣健二）
 - ▶ 著作権の分配を基本にしたタイアップ・プロモーションの制度化
- ▶ 1967年：ブルー・コメッツの「ブルー・シャトウ」がレコード大賞→GSの商業主義化

ビートルズ来日（1966年）

- ▶ 武道館コンサート（前座はドリフターズ）
- ▶ 四人は公演時以外外出禁止
- ▶ 一階席を取り払い、二階席には鉄柵。客電を消すことは禁止され、各所に警官を配置
- ▶ プラカードや垂れ幕は持ち込み禁止。席から立ち上がることも禁止
 - ▶ 動員された警察官はのべ8370人、補導された少年少女は6520人

アングラフォークと自作自演

- ▶ 関西を中心にしたアングラフォーク
- ▶ 第一回フォークキャンプ（1967年・京都）
 - ▶ 高石友也、フォーク・クルセダーズ、中川五郎…
- ▶ 自分たちの思いを自分たちの言葉で、自分たちで歌う
- ▶ 英米の音楽を鵜呑みにし、プロの作詞家・作曲家の操り人形だったGSを批判
- ▶ 主流社会からドロップアウトし、ドヤ街の肉体労働者など、社会的弱者へのシンパシーを歌う
- ▶ 1969年、アングラ・レコード・クラブ（URC）の設立：DIYによる自主制作レコードの流通
- ▶ あぶれた若者たち
- ▶ 戦後の闇市や赤線（公認の売春地区）、青線（非公認の売春地区）や歌舞伎町があり、雑多なエネルギーが渦巻く新宿に、地方から上京してきた若者たち（学生、芸術家、活動家、集団就職者など）が集まる
 - ▶ ゴーゴー喫茶
 - ▶ 1969年：新宿フォークゲリラ
- ▶ テレビの主流文化に対する《アングラ》空間としての深夜ラジオ
 - ▶ 「オールナイト・ニッポン」（ニッポン放送）、「バック・イン・ラジオ」（TBS）、「セイ！ヤング」（文化放送）

日本語はロックするか？

- ▶ ポプ・ディランなどの影響を受け、バンドスタイルを採用するフォークシンガーの登場
 - ▶ ジャックス（早川義夫）
 - ▶ 岡林信康+はっぴいえんど
- ▶ GSの商業化に疑問を持った一部アーティストが、「本物」のロックを求めて海外に渡航→ニューロック
 - ▶ ロック的なスタイルを採用し始めたフォークシンガーに対して強い敵対心
 - ▶ 「ロック」を名乗るには、英米のミュージシャンに引けを取らない演奏技術と世界観が必要
 - ▶ 世界市場での成功こそが本物の証
 - ▶ 日本語はロックにノらない。世界に出るなら英語
- ▶ 「日本語ロック論争」（『新宿プレイマップ』1970年10月号）
 - ▶ フラワー・トラヴェリング・バンドの内田裕也とはっぴいえんどの大滝栄一らによる激論
- ▶ エンタテインメントとしてのGSを否定し、アウトサイドとしてのフォークを否定し、残されたアート指向を貫く方向に進む
 - ▶ 村八分、頭脳警察、灰野敬二、裸のラリーズ、外道
 - ▶ 日本のロックの閉鎖性：結局3つの指向が同時に「ロック」の名のもとにまとまることはなかった

フランス：本物のロックはフランスにある？

ジャズの定着とブルゾン・ノワール

- ▶ ジャズの定着
 - ▶ ナチスにとってジャズは敵性音楽だったが、占領下のフランス人を懐柔するため、これを黙認していた
 - ▶ 終戦後、フランス政府は放送メディアを国有化し、国民アイデンティティの結束に利用した
 - ▶ 例外：米軍ラジオとフランス国外から放送されるペリフェリック局
 - ▶ ラジオ・ルクセンブルク
 - ▶ ヨーロッパ1→アメリカの番組スタイルを取り入れたジャズ番組を放送
 - ▶ サン・ジェルマン=デ=プレ地区
 - ▶ 米仏の先端的ジャズミュージシャンや左岸派シャンソン、ヌーヴェルヴァーグ映画関係者、知識人などが集まる
 - ▶ ジャズは映画とともに、《アート》の仲間入りしつつあった
- ▶ ロックンロールの到来
 - ▶ ロックンロールをジャズの続きと考える人たちと、低俗な商業音楽と見る人たちが対立
 - ▶ ロックンロールは、労働者階級の若者の身なりの悪さと結びつけられる（ブルゾン・ノワール（革ジャン族））

ジョニー・アリデーとエディー・ミッチェル

- ▶ アメリカからジャズレコードを輸入していた愛好家が、ロックンロールも扱い始める
 - ▶ エディー・バークレーのブルースター、レオン・カバのヴォーグ
 - ▶ 国内のロックンロールグループとも契約し、若者市場向けに販売し始める
- ▶ エディー・バークレー
 - ▶ レコードコンサートと最新のダンスステップを紹介する定期イベント「バークレークラブ」を開催
 - ▶ ディスコのはしり
 - ▶ 参加していたアマチュアグループのなかからジョニー・アリデーやエディー・ミッチェルといった後の大スターを発掘
 - ▶ 十代の若者を惹き付けるため、夜中ではなく昼間にイベントを行う。
 - ▶ お酒ではなく、ミルクやコココーラ
- ▶ 全国的なロックンロール・ブームが到来
 - ▶ 地方のカフェのジュークボックス
 - ▶ 60年代以降は《イエイエ》と呼ばれるようになる
- ▶ 《郊外》の誕生
 - ▶ 1950年代以降、パリ郊外の再開発計画が本格化

- ▶ パリ外周部を中心に高層集合住宅が立ち並ぶようになる
- ▶ 5つのニュータウン地区と、それを結ぶ高速鉄道の計画
 - ▶ 当時は郊外のマンションの方が設備も良く、もてはやされた。
- ▶ パリ市内の人口増加が止まる一方で、郊外の人口は急増する

電波メディアとイエイエ

- ▶ 若者市場に目を付け始める
 - ▶ レコードの売上は500万枚（1951年）から3000万枚（1960年）に
 - ▶ 服飾メーカーや香水メーカー、食品メーカーがバンドやイベントをスポンサー
 - ▶ ヨーロッパ1、十代向けの番組『サリュ・レ・コパン』開始（1959年）
 - ▶ トランジスタラジオの販売数は25万台（1958年）から260万台（1963年）に
 - ▶ 1964年、国営テレビ第2チャンネル開局。イエイエの取り入れ→アイドル
 - ▶ イエイエには女性ミュージシャンも多く、「平等を実現しているフランスのロックこそが本物」（！）

ビートルズ来仏（1964年）

- ▶ ビートルズ：1964年2月、オランピア劇場（前座はシルヴィー・ヴァルタン）
- ▶ 同年10月にはローリング・ストーンズも公演
 - ▶ この頃から、イエイエの商業主義を批判し、《本物》は英米にある、という主張が出始める

《本物》は英米のロックだけ

- ▶ イエイエのミュージシャンが既に《ロック》という言葉を使い古してしまっていたため、フランスでは《ポップ》という言葉が使われる
- ▶ 海賊ラジオ：放送免許をとらず、ぼろぼろの貨物船にラジオ送信機を載せ、公海上から放送する
 - ▶ ラジオ・キャロライン
 - ▶ 当初は規制のラジオ放送に飽き足らぬ有志による自由な放送だったが、後にレコード会社などから資金提供を受けるようになる
 - ▶ フランスの《ポップ》ファンには唯一「本物」が聴ける音源

五月革命と労働者との連帯（の失敗）

- ▶ 1968年5月、パリ郊外ナンテールの大学で学生がキャンパスを占拠。つづいてソルボンヌ大学がバリケード封鎖される→全国に飛び火し、ゼネストへ発展
 - ▶ 学生たちはスト中の工場などに赴き、労働者との共闘を求める→あまり成功せず
- ▶ ジョルジュ・ブラッサンスなどの左岸派シャンソンやフリージャズが好まれ、あるいは英米のロックが聴かれるが、フランスのロックはほとんど相手にされず
- ▶ 左岸派シャンソン（アウトサイド）、イエイエ（エンターテインメント）、フリージャズ（アート）と3つの指向を全て既存ジャンルに牛耳られたフランスのロックは、身近に利用出来るメディアもなく（海賊ラジオと接近するのは困難だった）、フリージャズや前衛音楽的なものを取り入れつつ、そこに寄生するしかなかった。
 - ▶ マグマ、アール・ゾイド

ロックの希薄化

ニューミュージック（70年代以降）

- ▶ フォークから反体制メッセージを失った、私生活的フォーク
 - ▶ 吉田拓郎、井上陽水、かぐや姫……
- ▶ フォークから決別し、自己肯定的な歌詞と洗練されたサウンドによる新しいポピュラー音楽
 - ▶ 荒井（松任谷）由美
 - ▶ 分類に苦慮したレコード会社がニューミュージックと名付ける

ヌーヴェル・シャンソン・フランセーズ（70年代以降）

- ▶ 英米ロックグループの影響力の多様化、低下し、左岸派シャンソンやイエイエのアーティストが《ポップ》の手法を取り入れる
 - ▶ レオ・フェレ、ジャック・イジュラン、セルジュ・ゲンズブール、ローラン・ヴァルジー
 - ▶ 分類に苦慮したレコード会社が新しいシャンソン（ヌーヴェル・シャンソン・フランセーズ）と名付ける